

上野第2遺跡

上野第2遺跡



市内遺跡発掘調査報告書第119集
日田市埋蔵文化財調査報告書第119集

2015年



日田市教育委員会

2015年
日田市教育委員会

卷頭写真図版 1



上野台地から日田盆地を望む



調査区全景（画面上が北）



調査区西半（画面上が北）



1号石蓋木棺墓掘り下げ状況

序 文

本報告書は、当委員会が平成 15 年度に発掘調査を実施しましたが上野第 2 遺跡の調査内容をまとめたものです。

上野第 2 遺跡は日田盆地の中で三隈川南岸の上野台地に位置し、弥生時代の豪華な副葬品を伴う大型成人用壺棺墓群が発掘された吹上遺跡を、川を挟んで北に望む場所にあたります。本遺跡では小児用壺棺墓など多様な弥生時代の墓群が見つかり、弥生時代には墓地として利用されていたことがわかりました。日田市内では、弥生時代の集落や墓地は盆地を取り囲む台地など小高い場所に多く存在していましたが、これまでの発掘調査で明らかになっていきます。当時、この上野第 2 遺跡からそれらの集落をまさに一望できたことでしょう。

この貴重な調査成果をまとめた本書が、文化財の保護や普及啓発、また地域の歴史を知る手がかりとしてご活用いただければ幸いです。

最後に、調査から整理・報告書作成にいたるまで、ご指導ご協力を賜りました多くの関係者の皆様方に対し、心より厚くお礼を申し上げます。

平成 27 年 3 月

日田市教育委員会

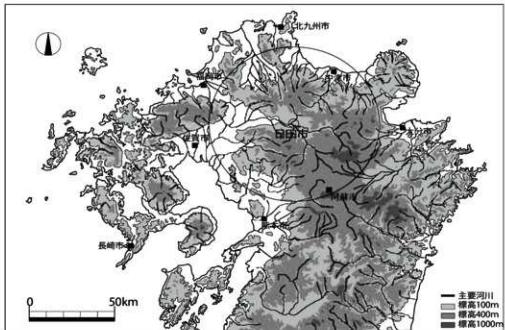
教育長 三苦 真治郎

例　　言

1. 本書は、日田市教育委員会が国庫・県費の補助を受けて平成15年度に実施した上野第2遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、市内遺跡等調査事業（当時の事業名：日田地区遺跡群発掘調査事業）として実施したものである。
3. 調査にあたっては、国土交通省九州地方整備局大分工事事務所、市都市計画課（当時）、工事関係者、土地所有者および地元の方々にさまざまなご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
4. 調査現場での遺構実測は調査担当者が行ったほか、雅企画有限公司に委託した。
5. 本書に掲載した遺構実測および遺構・遺物の製図は、雅企画有限公司および株式会社九州文化財総合研究所に託し、その成果品を使用した。
6. 本書に掲載した空中写真は九州航空株式会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。
7. 本書に掲載した遺構写真是調査担当者が撮影したもののか、雅企画有限公司に撮影を委託し、その成果品を使用した。
8. 本書に掲載した遺物写真是雅企画有限公司に撮影を委託し、その成果品を使用した。
9. 本書に掲載した挿図中の方位は、遺構配置図については国土地理院（世界測地系）に基づき表示しているほかは、全て磁北である。
10. 写真団版の遺物に付した数字番号は、挿図番号に対応する。
11. 出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
12. 本書の執筆・編集は、行時が担当した。

本 文 目 次

I 調査の経過	1
II 遺跡の位置と環境	3
III 調査の内容	5
(1) 調査の概要	5
(2) 遺構と遺物	5
1) 堅穴建物	5
2) 掘立柱建物	5
3) 瓢棺墓	8
4) 方形周溝墓	13
5) 石蓋木棺墓	13
6) 石棺墓	17
7) 祭祀土坑	17
8) 土坑	17
9) 溝	20
10) その他の遺物	21
IVまとめ	22



日田市の位置

挿図目次

第1図 調査区位置図(1/2,500)	2	第12図 1号石蓋木棺墓実測図(1/40)	15
第2図 周辺遺跡分布図(1/50,000)	5	第13図 1号石蓋木棺墓完掘状況実測図	
第3図 基本土層図(1/20)	5	(1/40)	16
第4図 遺構配置図(1/300)	6	第14図 1号石棺墓・1号祭祀土坑実測図	
第5図 1号竪穴建物・カマド実測図 (1/60・1/30)	7	(1/30・1/20)	18
第6図 1号掘立柱建物実測図(1/60)	8	第15図 土坑実測図(1/40)	19
第7図 1～4号甕棺墓実測図(1/20)	10	第16図 1号溝実測図(1/80)	20
第8図 5・6号甕棺墓実測図(1/20)	11	第17図 出土遺物実測図(1/4・2/3・1/2)	
第9図 1～5号甕棺墓実測図(1/8)	12	第18図 墳墓群部分拡大図(1/200)	22
第10図 6号甕棺実測図(1/8)	13	第19図 H12県調査区との合成図	
第11図 1号方形周溝墓・主体部実測図 (1/60・1/30)	14	(1/500)	23

挿入写真目次

写真1 東1トレンチ	1	写真4 作業風景	2
写真2 東2トレンチ	1	写真5 墳墓群周辺遺構検出状況	2
写真3 西トレンチ	1	写真6 基本土層	5

写真図版目次

巻頭写真図版1 上野台地から日田盆地を望む／調査区全景(画面上が北)	
巻頭写真図版2 調査区西半(画面上が北)／1号石蓋木棺墓掘り下げ状況	
図版1 1号竪穴建物／1号竪穴建物カマド／1号掘立柱建物／1～4号甕棺墓	
図版2 4～6号甕棺墓／1号方形周溝墓	
図版3 1号方形周溝墓／1号石蓋木棺墓	
図版4 1号石棺墓／1号祭祀土坑／39号土坑／1号溝	
図版5 出土遺物	

表目次

第1表 出出土器観察表	24
第2表 出土石器観察表	24

I 調査の経過

平成 15 年 4 月、市都市計画課（当時）を通じ、国土交通省九州地方整備局大分工事事務所（以下、国交省）より、当時建設中であった大字上野の国道 210 号日田バイパス予定地沿いの個人所有の土地について、土取工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の要否に関する問い合わせがあった。対象地は、国交省と地権者の間で、バイパス工事に伴う土取工事後畑地へ変更する約束が取り交わされており、事業主体は地権者個人であった。対象地はバイパス工事に伴い大分県教育委員会が発掘調査を行った上野第 2 遺跡の調査区の北隣にあたり、県の調査では弥生時代の墳墓群を中心とした遺跡が確認されていることから、対象地にも遺跡が広がっていることはほぼ確実視されたため、工事の前に発掘調査が必要である旨を相手方に伝えて協議を行った。

切土になる以上、発掘調査は避けられないため、調査の実施時期と費用負担が問題となった。時期については、農地転用許可が 7 月頃に予定されていることなどを考慮し、秋頃の実施を目指して調整することになった。費用負担については、個人の土砂採取や畑地造成に伴う調査を国庫補助事業にて対応してよいか県教育委員会（文化課）と協議を行い、「市内遺跡等調査事業」（旧「日田地区遺跡群発掘調査事業」）にて実施することになった。7 月末には現地にて各関係者と協議を行い、8 月 18 日から調査に着手した。調査の経過は次のとおりである。

8 月 18 日 重機による遺構検出開始（～22 日）重機は国交省提供

工事対象区域のうち北の一段低い水田部分にトレーナー 3 本を設定し遺跡の有無を確認したところ、遺跡の存在は認められなかったため、本調査の対象から除外した。（確認面までの深さ…東 1 トレーナー：約 1 m、東 2 トレーナー：約 0.7 m、西トレーナー：約 1 m）

19 日 作業員による遺構検出作業開始

24 日 基準杭設定、測量作業

29 日 遺構掘り下げ開始

～甕棺墓など弥生時代の墳墓群を中心とした遺構が確認される～

9 月 22 日 別府大学・下村 智助教授（当時）現地指導

30 日 遺構写真撮影（委託）実施

10 月 1 日 空撮

7 日 現地での作業終了

また、平成 25 年・26 年度には報告書作成作業を実施し、26 年度に刊行した。

調査に関する組織は次のとおりである。（肩書は当時のまま）

（平成 15 年度）発掘調査

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 後藤元晴（日田市教育委員会教育長）～7 月

諫山康雄（ 同 ）8 月～

調査統括 後藤 清（日田市教育庁文化課課長）

調査事務 佐藤 児（日田市教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財係長）

園田恭一郎（同主査）、酒井 恵（同主事補）

調査員 土居和幸（同主査）、若杉竜太（同主事）

調査担当 行時桂子（同主任）、渡邊隆行（同主事）

調査指導 別府大学助教授 下村 智

来訪者 馬田弘穂（九州歴史資料館）



写真1 東1トレーナー

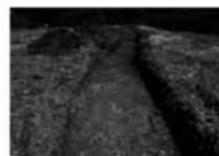


写真2 東2トレーナー



写真3 西トレーナー

発掘作業員 足立米子、穴井昌生、宇野京子、小野忠臣、梶原正行、
北澤幾子、五反田静子、後藤孝市、財津利枝、財津由太、
坂本今朝人、高倉厚巳、高倉富美子、高野 瞳、田中 畑、
筒井英治、平原知義、宝珠山三男、横尾安男

(平成 25・26 年度) 報告書作成

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）～26 年 6 月
三苫眞治郎（ 同 ） 26 年 7 月～

調査統括 財津俊一（日田市教育文化財保護課長）

調査事務 園田恭一郎（日田市教育文化財保護課埋蔵文化財係長）
武内貴彦（専門員）・華藤善紹（副主幹）25 年度
上原邦平（同主任）
諫山温子（同主事）26 年度

調査員 若杉竜太（同主査）、渡邊隆行（同主査）

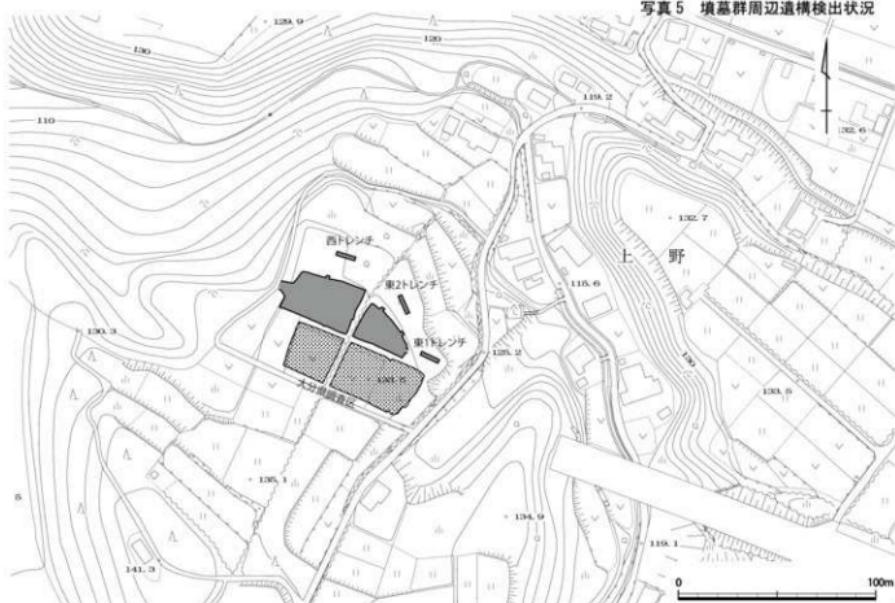
報告書担当 行持桂子（同主査）



写真 4 作業風景



写真 5 墓群周辺遺構検出状況



第1図 調査区位置図 (1/2,500)

II 遺跡の位置と環境（第2図）

上野第2遺跡（15）が所在する日田市は大分県の北西部に位置し、福岡県と県境を接する。周囲を一尺八寸山や五条殿、月出山岳など700～800m級の山岳に囲まれた盆地を形成している。この山岳の外側にはさらに標高の高い900～1,200m級の山々（釣連岳・御前岳・尾ノ嶺など）が続き、県境や市境となっている。盆地を横断するように西流する三隈川は筑後川の上流域にあたり、盆地内で玖珠川や花月川と合流して福岡県を経て、有明海へと流れ出る。上野第2遺跡はこの三隈川の南岸に広がって盆地たらしめている、標高約130m、盆地底部に広がる市街地から比高約50mを測る阿蘇4火砕流の溶岩台地上（日田ではこのような溶岩台地を「～原（はる）」と呼ぶ）に存在する。この溶岩台地は三隈川南岸に限らず北岸にもほぼ同じ高さで分布しており、日田盆地においては主に弥生時代になってこの台地上に人々が生活を始めることが明らかになっている。ここではまず弥生時代の日田盆地を概観してみる。

日田盆地の弥生時代で代表的な遺跡は吹上遺跡（4）である。吹上遺跡は上野第2遺跡からほぼ真北に約3km離れた吹上原一体に広がる弥生時代前期後半～後期の遺跡で、各時期の集落のほか、特に弥生時代中期後半の成人用甕棺墓を中心とした特定集団墓が確認されている、市内では最も規模の大きな弥生時代遺跡である。吹上遺跡から谷を挟んで北側にある台地上にも、小迫原に小追辻原遺跡（2）、山田原に後追遺跡（3）、宮ノ原に朝日宮ノ原遺跡（1）など集落と墓群が点在している。盆地の東を区切る台地に目を向けると、佐寺原に佐寺原遺跡（5）、元宮原に元宮遺跡（6）があり、いずれも住居や墓が確認されている。元宮原から西に下った台地裾では中期～後期の集落である会所宮遺跡（7）が、南に下った沖積地には集落と甕棺墓などからなる柳ノ本遺跡（8）^(注1)が所在する。また、盆地底部の西寄り、庄手川と三隈川の合流付近の中州ともいえる微高地には弥生時代のはぼ全時期にわたる集落と後期の大溝が確認された徳瀬遺跡（9）がある。台地上のみならず、河川沿いでありながら水害を免れ得る微高地でも、当時から生活が営まれていたことが明らかになってきている。

次に、上野第2遺跡が所在する三隈川南岸の遺跡について時代を追って概観する。旧石器時代の明らかな遺構は見つかっていないが、長者原遺跡（13）ではナイフ形石器や細石刃が、手崎遺跡（24）では台形様石器などが採集されている。縄文時代になると長者原遺跡で集石や手崎遺跡で住居跡など明確な生活の痕跡が点々と見られるようになる。これらは比較的長期にわたって営まれた集落とされるが、ほかにも大部遺跡（25）・口が原遺跡（23）・上野第1遺跡（16）などでは土器や石器のみ見つかっており、拠点集落とその周辺での短期的な生活痕跡といった様相を呈していたものと思われる。また牧原遺跡（26）では縄文時代の土偶の一部が出土している。弥生時代の遺跡としては、環濠を伴う集落が確認された惣田遺跡（21）がある。そのほか長者原遺跡でも大規模な溝が確認されている。また、上野第1・第2遺跡の近くの上野集落周辺では、前期～中期の土器が採集されており、集落の存在が想定される。その一方で後期になると惣田遺跡の背後にあたる丘陵の決して条件が良いとはいえないわずかな平坦地にも、口が原遺跡で小集落が営まれている。古墳時代の集落の遺跡としては手崎遺跡・口が原遺跡・陣ヶ原遺跡（19）・長者原田迎遺跡（12）等が挙げられるが、長者原田迎遺跡を除いてはそれほど大きな集落が確認されていない。にもかかわらず、墳墓の数は比較的多く、前期の方形周溝墓などが見つかった牧原遺跡、中期の竪穴式石室を2つもつとされる姫塚古墳（17）、後期の横穴式石室をもつ惣田塚古墳（22）、装飾古墳として知られるガランドヤ古墳群（10）・穴觀音古墳（11）、また上野集落から石井集落に向かう尾根上には1基の前方後円墳と2基の円墳からなる護願寺古墳群（14）などがあり、発掘調査未実施の場所でこれらの古墳に対応する集落遺跡が見つかる可能性もある。古代の遺跡としては奈良時代に属するものが多く、7世紀の水路遺構が見つかった惣田遺跡をはじめ、手崎遺跡・口が原遺跡・陣ヶ原遺跡・長者原田迎遺跡などで集落が確認されている。そしてこの時代で特筆されるのは上野第1遺跡の掘立柱

建物群であろう。律令期、日田盆地は豊後國日田郡となり5つの郷に分けられ、三隈川南岸一帯は「石井郷」とされた(『豊後國風土記』)。この石井郷には「石井駅」が設置された(『延喜式』)ことから、当時の官道は石井郷を通っていたものとされ、上野第1遺跡では「豊馬豊馬」と刻書のある權が出土しており、この建物群が駅そのものであるかどうかは判断できないが、官道が付近を通っていたとの証左になると考えられている。また最近の調査で、姫塚古墳に程近い銭渦遺跡(18)において、方形掘り方をもつ大型の掘立柱建物が確認されており、公的施設の存在が推定されている^(注1)。平安時代の遺跡はほとんど確認されておらず、手崎遺跡で9世紀の土坑と土器が見つかった程度である。中世には三隈川南岸のなかでも高瀬地区に5つの寺院があったとされ、そのうちの1つ、永平寺(いひじ)跡には現在1311(応長元)年・1313(正和2)年銘の板碑(ともに市指定有形文化財)(27)が残されており、付近で行われた高瀬条里永平寺地区(20)の調査では当時のものと考えられる掘立柱建物が確認されている。同じく5つの寺院のうちの1つとされる普門寺には1409(応永16)年銘の木造像である開山頂相(市指定有形文化財/市立郷土資料館蔵)(28)が伝わっている。

(注1) これまでも要棺墓の発見例があったが、平成26年度の発掘調査で、要棺墓や石室墓からなる墳墓群などが確認されている。

(注2) 平成26年度発掘調査実施。

《参考文献》田中裕介『日田市高瀬遺跡群の調査3 上野第1遺跡』一般国道220号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 大分県教育委員会 2008

高橋徹ほか『日田市高瀬遺跡群の調査4 寺内遺跡／上野第2遺跡』同上Ⅳ 大分県教育委員会 2002

『日田市史』日田市 1990、その他日田市教育委員会発行の関係遺跡の発掘調査報告など



第2図 周辺遺跡分布図(1/50,000)

III 調査の内容

(1) 調査の概要（第3・4図）

調査対象地とその付近一帯は畑として利用されており、南側に隣接する日田バイパス建設の際にすでに遺跡の存在が確認されていたため、今回の対象地にも遺跡が広がるものと想定されたことから、対象地東側より遺構検出面まで重機で掘り下げ、遺構の確認を行なった。調査区は東西長さ約68m、南北幅は最大で約25m、バイパスに沿うように細長い形を呈し、調査区中央よりやや東を南北に流れる水路によって2区画に分断される（以下、水路より西側を「西半」、東側を「東半」とする）。調査面積は約1,500m²を測る。北に向かってわずかに傾斜するもののほぼ平坦な地形であり、本来はもっと起伏があったものを畠地開墾の際に削平・埋め立てが行われたものと思われる。

調査で確認された遺構は、竪穴建物1軒、掘立柱建物1棟、甕棺墓6基、方形周溝墓1基、石蓋木棺墓1基、石棺墓1基、祭祀土坑1基、土坑40基、溝1条、ピットである。以下、遺構ごとに説明を加える。

(2) 遺構と遺物

1) 竪穴建物

調査区東半北寄りで1軒検出された。

1号竪穴建物（第5図、図版1）

平面方形を呈すると思われる遺構である。南北軸約3.8m、東西軸約2.1m+α、床面までの深さは最大で約12cmを測る。標高の低い東半を欠き、南側の一部は後世の畑の縁に削られている。北側のピットが主柱穴のひとつである可能性があるが、その他の主柱穴は検出できなかった。このピットの深さは約13cmを測る。壁際溝は見られない。西壁中央にカマドが備えられているが、袖は残存しない。袖石抜取痕と思しき小ピットが2つ見られるが、左右で位置が異なるため、断定できない。カマドは建物壁より最大で約40cm張り出している。

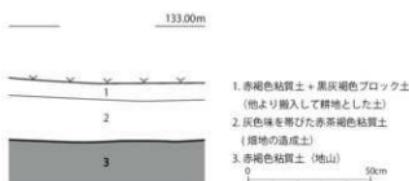
この遺構からは時期不明の土器小破片が数点出土しているが、図示可能なものはなかった。

2) 掘立柱建物

調査区西半西寄りで1棟検出された。

1号掘立柱建物（第6図、図版1）

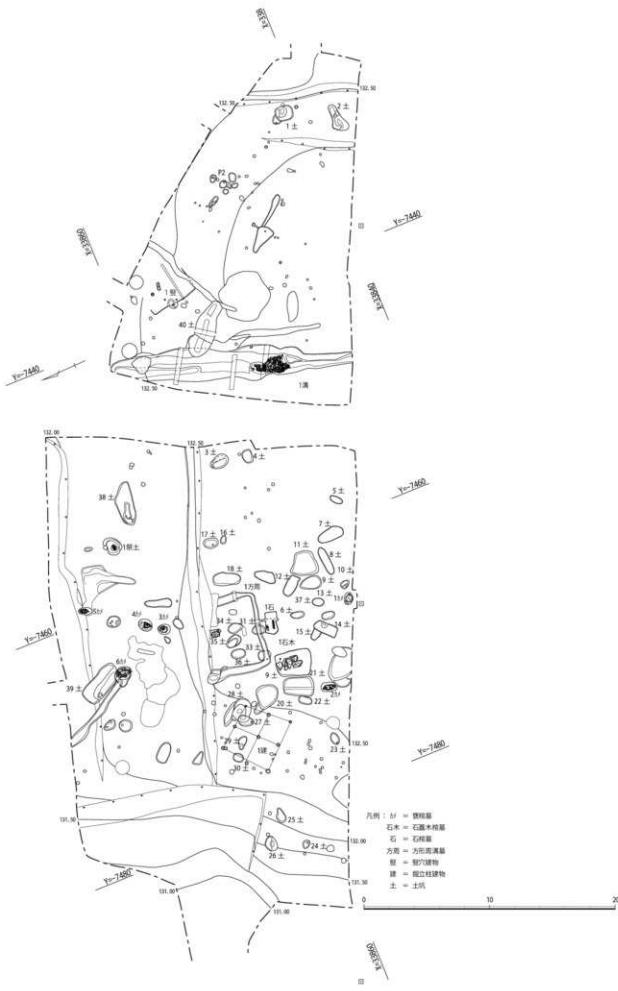
主軸方向をN37°Wにとり、柱間は2間×2間の総柱建物である。規模は柱穴間の心心距離で約4.0m×8m、面積約15.2m²、検出面での柱穴の掘り方は直径15～35cmの円形を呈す。削平のためか柱穴の深さは8～17cm程度しか残存していない。柱痕跡は検出されなかった。この遺構からは遺物の出土はなかった。



第3図 基本土層図 (1/20)



写真6 基本土層



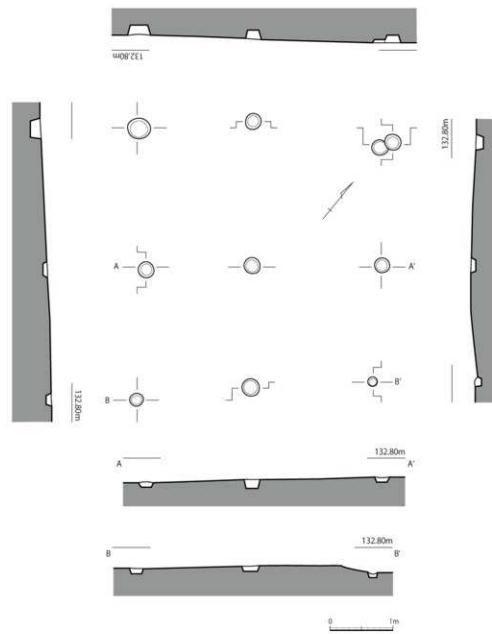
3) 墓棺墓

調査区西半中央で6基検出された。2～5号は1号方形周溝墓や1号石蓋木棺墓などとともに直線上に並び、1・6号はこの直線上からは逸脱した位置にある。

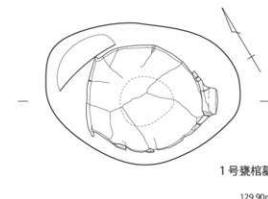
1号壇棺墓（第7・9図、図版1・5）

調査区西半中央南端で検出された單棺の壇棺墓である。墓坑検出面での掘り方の規模は、長軸約0.95m、短軸約0.72mを測る。主軸方向はN 68°Wである。墓坑内部には小さなテラス状の段を有する。埋置角度は口縁から推定して約18°を測る。蓋石はなく、木蓋であった可能性がある。

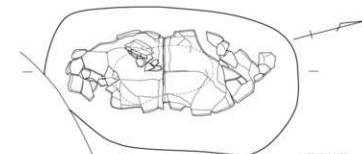
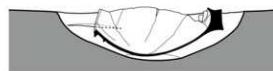
第9図1は使用されていた甕で、口縁部は外側から粘土紐を貼り付けて断面コの字状を呈し、頭部やや下方に断面三角状の突帯を1条めぐらす。胴部上方が特に張り出し、底部にかけて緩やかにすぼまる。底部は厚く平坦である。外面には縦ハケが、口縁内部には指オサエが残っている。



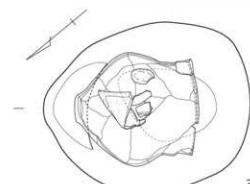
第6図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)



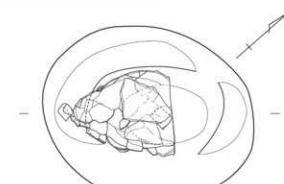
1号壇棺墓



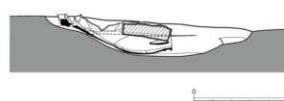
2号壇棺墓



3号壇棺墓



4号壇棺墓



第7図 1～4号壇棺墓実測図 (1/20)

2号壺棺墓（第7・9図、図版1・5）

調査区西半中央南端、1号壺棺墓の北西約7mで検出された合口壺棺墓である。墓坑検出面での掘り方の規模は、長軸約1.3m、短軸約0.7mを測る。主軸方向はN 166° Wである。上部を大きく削平されている。壺は2個体ともほぼ水平に据えられているが、北側の壺の腹部がわずかに高いため上壺と思われる。下壺には内部に石が流入しており、標石の可能性が考えられる。

第9図2は上壺で、口縁部は断面逆L字状を呈し内傾する。頸部や下方に断面三角形状の突帯を1条めぐらす。胴部の張りはさほど強くない。底部を欠損している。口縁部外面に指オサエが残る。3は下壺で、胴部上半の一部は破片が小さく接合しきれなかった。口縁部は断面三角形状を呈し、やや内傾気味である。頸部や下方に断面三角形状の突帯を1条めぐらす。底部は厚く平坦である。外外面とも摩滅が著しく、調査は不明である。

3号壺棺墓（第7・9図、図版1・5）

調査区西半中央、2号壺棺墓の北東約14mで検出された壺棺墓である。墓坑検出面での掘り方の規模は、長軸約1.0m、短軸約0.7mを測る。主軸方向はN 141° W、埋置角度は約12°である。対になる壺や蓋石はなく、木蓋であった可能性がある。棺内部には石が流入しており、標石の可能性が考えられる。

第9図4は使用されていた壺で、口縁部は曲がりの浅い意状を呈し、端部からやや内側に入った位置に断面三角形状の突帯を1条めぐらす。頸部と胴部の境目にも断面三角形状の突帯を1条めぐらす。広い頸部から胴部がやや張り出し、底部へとすぼまる。底部は上げ底気味である。頸部外面に縦ハケが残る。胴部内部には粘土の接着痕と指オサエが残る。

4号壺棺墓（第7・9図、図版1・2・5）

調査区西半中央、3号壺棺墓の北東に隣接して検出された壺棺墓である。墓坑検出面での掘り方の規模は、長軸約1.15m、短軸約0.9mを測る。主軸方向はN 40° E、埋置角度はほぼ水平、約5°を測る。対になる壺や蓋石はなく、木蓋であった可能性がある。下壺内部には石が流入しており、標石であった可能性がある。

第9図5は使用されていた壺で、胴部下半の一部は破片が小さく接合しきれなかった。口縁部は外側から粘土紐を貼り付け、断面三角形状につけられ、外傾気味である。頸部や下方に断面三角形状の突帯を1条めぐらす。底部は厚いものの、平坦か上げ底かは不明である。胴部外面に縦ハケが残る。

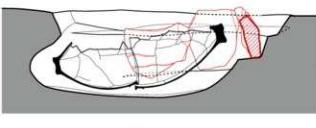
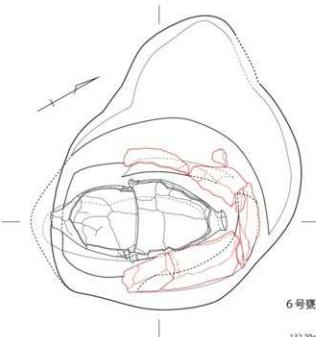
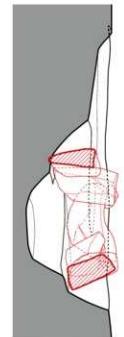
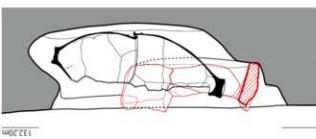
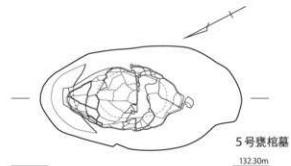
5号壺棺墓（第8・9図、図版2・5）

調査区西半中央北寄り、4号壺棺墓の北東約5mで検出された合口壺棺墓である。墓坑検出面での掘り方の規模は、長軸約1.1m、短軸約0.6mを測る。大きく削平を受けているため、特に上壺は胴部～底部の大部分を失っている。調査時には壺棺の傾きから、残りの良いほうを下壺と判断したが、テラスの状況や壺のサイズからは残りの良いほうが上壺であった可能性も考えられる。しかしここでは調査時の所見にならう。主軸方向はN 158° W、壺棺の埋置角度は約9°を測る。

第9図6は上壺で、胴部は破片が小さく接合しきれなかった。口縁部は断面逆L字状を呈し、頸部外面には横ハケが残り、内面は特に丁寧にナデが施されている。底部は平坦である。7は下壺で、口縁部は断面三角形状を呈し、若干外傾気味である。胴部上半がやや張り出し、底部に向かって直線的にすぼまる。底部は上げ底である。内外面とも摩滅が著しく、ナデ以外の調整は不明である。

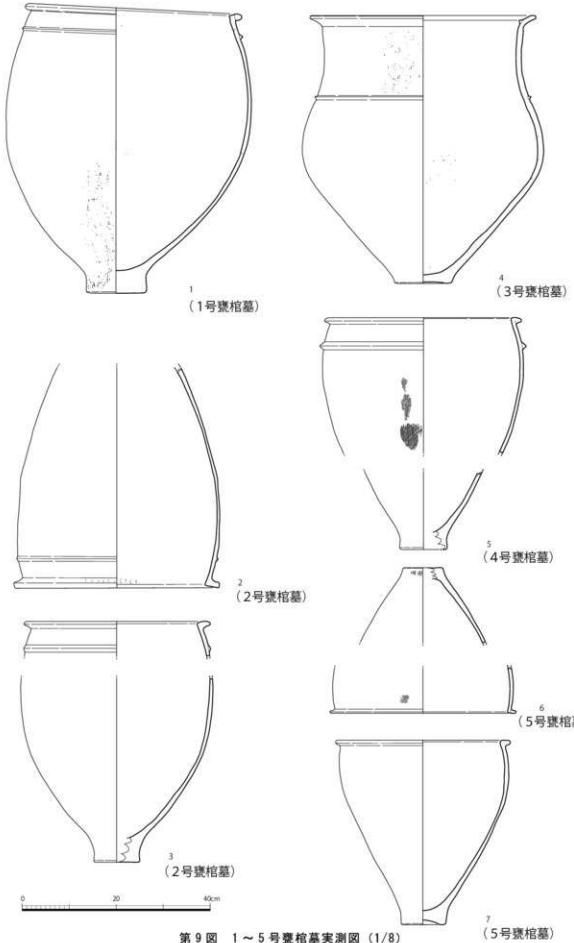
6号壺棺墓（第8・10図、図版2・5）

調査区西半中央北寄り、3～5号壺棺墓の列から約4m西に離れた場所で検出された合口壺棺墓である。墓坑検出面での掘り方の規模は、長軸約1.3m、短軸約1.0mを測る。墓坑内にはテラスを設け、そこから斜め方向に壺棺を挿入したうえ、上壺を凝灰岩の板石で囲うという、特異な方法を探っている。いわゆる棺外施設をもつ壺棺墓である。主軸方向はN 32° E、壺棺の埋置角度は約10°を測る。



50cm

第8図 5・6号壺棺墓実測図 (1/20)



第9図 1～5号壺棺墓実測図(1/8)

12

第10図8は上窓で、口縁部は断面三角形状を呈し、外傾している。頸部や下方に断面三角形状の突帯を1条めぐらす。頸部付近のしまりは弱く、緩やかに底窓へとすぼまる。底部は厚く上げ底窓味である。内外面とも摩滅が著しいが、口縁部から胴部上半にかけて内面に指オサエが残っている。9は下窓で、口縁部は断面突出状を呈し、頸部や下方に断面三角形状の突帯を1条めぐらす。胴窓の張りは強くなく、緩やかに底部へとすぼまる。底部は厚く上げ底窓味である。内外面とも摩滅が著しいが、外面の胴部および底部に継ハケ、内部の胴部および底部付近には指オサエが残る。

4) 方形周溝墓

調査区西中央で1基検出された。2～5号壺棺墓の直線上にあたる。

1号方形周溝墓 (第11図、図版2・3)

周溝および主体部の北側を現代の区画溝により失っているが、周溝が区画溝を挟んで向かいまたは延びていないことから、本来はほぼ方形を呈していたものと思われる。また表土を除去した時点では主体部の蓋石が表れたことから、全体的に大きく削平を受けていると思われる。周溝の規模は、東西約6.5m、南北約5.3m+a、断面は浅い逆台形を呈し、深さは約5～20cmを測る。主体部は石蓋土坑墓Ⅰ基で、周溝の中心からや北寄りの位置に地山を掘り込んでつくられている。蓋石は凝灰岩2枚と安山岩の板石1枚が残存していた。墓坑の規模は長軸約0.7m+a、短軸約0.6m、蓋石上面から墓坑床面までの深さは最大で約25cmである。主軸方向はN 160° W、頭位は南と思われる。周溝同様に墓坑も非常に浅く、棺内から人骨や遺物の出土はなかったが、安山岩の蓋石のそばから土器が1点出土している。

出土遺物 (第17図、図版5)

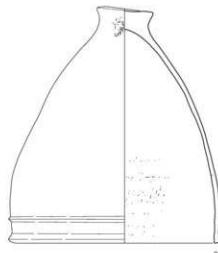
3は弥生土器甕の頸部片である。内外面とも摩滅のため調整は不明である。

5) 石蓋木棺墓

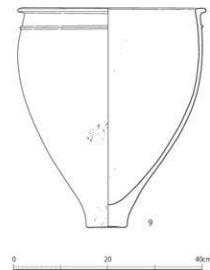
調査区西半1号方形周溝墓の南に隣接して1基検出された。当初は石棺墓あるいは石蓋土坑墓と想定していたが、掘り下げる過程で木板をはめ込んだと思われる掘り方が確認されたため、石材と木板を併用した墓であると判断した。

1号石蓋木棺墓 (第12・13図、図版2)

石材と木材を併用した墓である。当初、他の遺構と同じ検出面において長軸約2.85m、短軸約2.0mを測る平面不整形台形を呈する土筑の中央に凝灰岩が不定方向ながら集中して検出されたため、石棺墓の掘り方および蓋石と考えていたが、掘り進めていくと、これらの石の下約25cmの深さにおいてさらに蓋状および側壁を構成する石材が検出された。主体部では側壁を構成する石材は一部に限られ、そのほかの側壁の部分については木板をはめ込んだと考えられる掘り方が検出された。主体部の規模は、長軸約2.3m、短軸約0.85m、遺構検出面から床面までの深さ約65cmを測る。主軸方向はN 17° E、主体部掘り方の幅から、頭位は北であったと考えられる。頭位・足位とも小口には掘り方や石材は見られない。

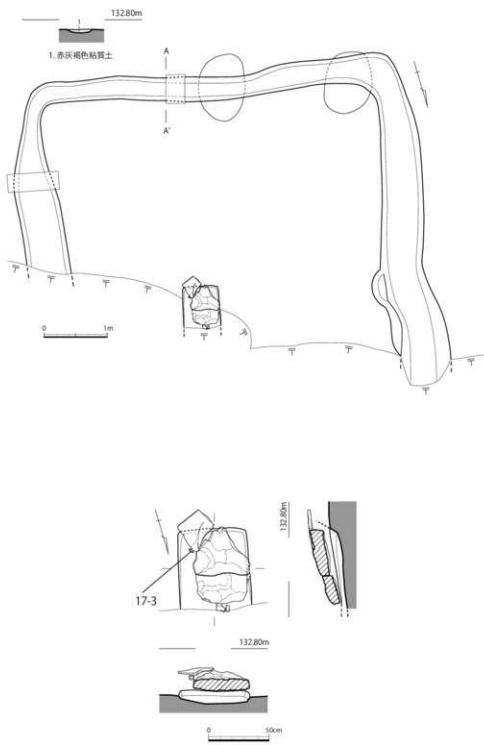


8

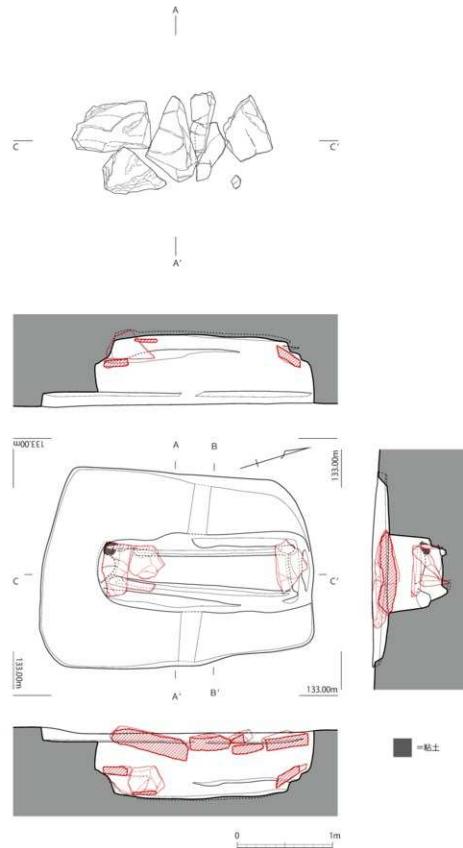


第10図 6号壺棺実測図(1/8)

13

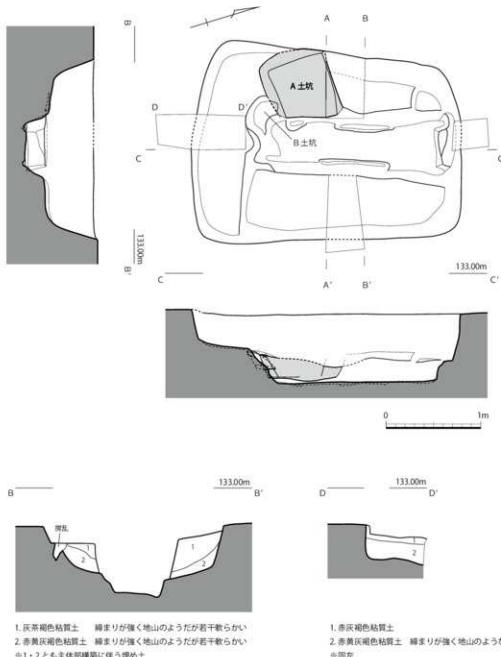


第11図 1号方形周溝墓・主体部実測図 (1/60・1/30)



第12図 1号石蓋木棺墓実測図 (1/40)

足位は石材が両側に1枚ずつ見られ、その上に石が1枚乗り、もう1枚は東側が内部に落ちた状態で検出されている。この石や頭位にある石材は本来蓋石であったものが内部に落ち込んだものの可能性がある。なお、主体部のまわりの土層観察から、主体部は地山整形によるものではなく、地山によく似るがわずかに軟質の礫土からなっていた。第13図中のA土坑は1層では平面的に確認できなかったため2層から掘り込まれていたと思われる、側壁を壊していないことから、この墓と別物ではなく埋葬作業の段階で必要であった何らかの付随施設の可能性がある。また同図中のB土坑については、内部に赤茶褐色粘土が充填されており、足位側壁の脆弱性を粘土で補強したものと思われる。



第13図 1号石蓋木棺墓完坂状況実測図(1/40)

この遺構からは小土器片が数点出土したが、図示可能なものはなかった。

なお、西隣に同規模同方向の21号土坑が見られるが、トレンチを設定して掘り下げたところ、墓に類する遺構ではないことが確認された。

6) 石棺墓

調査区西半、1号方形周溝墓の南に隣接して1基検出された。

1号石棺墓 (第14図、図版4)

表土を除去した段階で石材が露出しており、精査の結果石棺墓と判断した。大きく削平を受けているため蓋石はすでなく、わずかに側壁を構成する安山岩の板石が数枚確認された。掘り方の規模は長軸約1.2m、短軸約0.95m、残存する深さは約10cmである。墳土と地山の差がほとんどなく、掘り方の南側は掘りすぎたため、復元線で表現している。主軸方向をN 132° Eにとり、側壁の掘り方から頭位は南東と思われる。棺材の残存状況が悪いため全容は不明であるが、残存している棺材だけを見れば、安山岩のみで構築された墓はこの墓だけである。

この遺構からの出土遺物はなかった。

7) 祭祀土坑

調査区西半北寄り、5号斐哲墓の南東で1基検出された。

1号祭祀土坑 (第14図、図版4)

長軸約1.55m、短軸約1.2m、深さは最大で約28cmを測る不定形の土坑である。中央やや西寄り検出面付近で、凝灰岩の石材とともに床面から浮いた状態で壊と壺が出土した。壊は口縁を東に、壺は口縁を南に向けた状態であった。これらはほぼ完形であること、また周囲からの流れ込みとは異なり1箇所にまとまった状況で検出されたことから、祭祀土坑と判断した。なお、上記の壊とは別個体の壊の脚部片も出土しているが、図示できなかった。

出土遺物 (第17図、図版5)

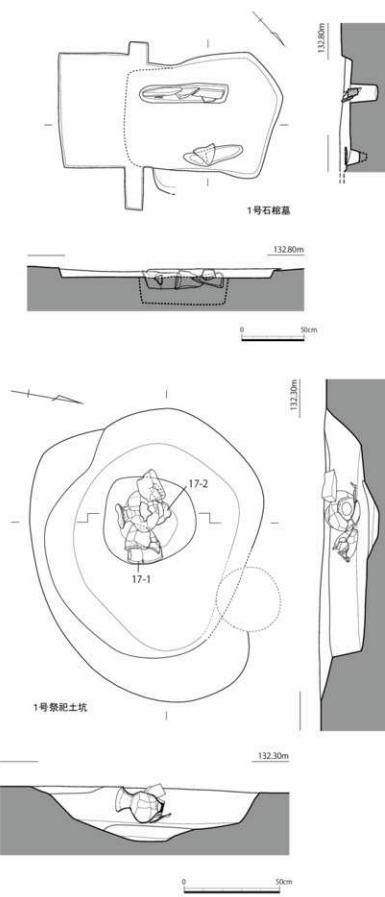
1は弥生土器壊である。口縁は丸みを帯びたコの字状を呈し、やや内傾気味である。頸部に突窓はない、頸部から脚部にかけてはほとんど張らずに底部へとそぼまる。底部は欠損している。外面に縦ハケが残る。2は弥生土器壺である。口縁部をわずかにぐくがほぼ完形である。くびれた頸部から、口縁部は大きく開き、脚部も特に肩部が強く張り出す。底部は厚い平底を呈す。外面頸部および底部には縦ハケ、外面部は横方向に磨きが施されている。頸部内面には粘土紐の接続痕と指オサエが残る。外面の一部に黒斑が見られる。

8) 土坑

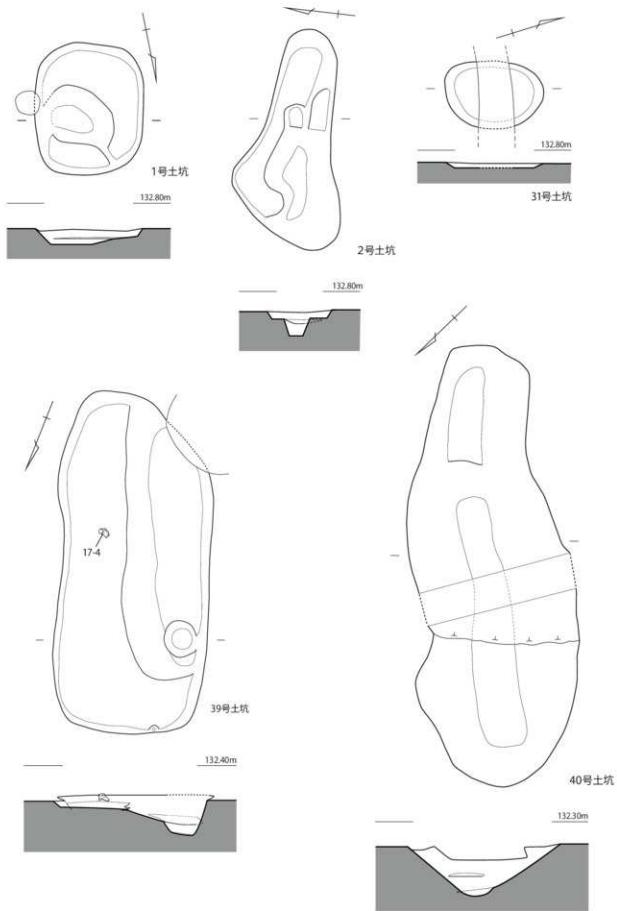
遺構検出面において調査区全体にわたり土坑状の掘り込みが40基ほど見られ、小児用焼棺墓などの墓と混在していたことから、当初はこれらを遺構として掘り下げたが、ほとんどは浅く遺物の出土もなかった。そのため、ここでは遺物の出土があったものの5基のみ報告する。なお、遺構番号は調査時のまます。

1号土坑 (第15図)

調査区東半東寄りで検出された平面長円形を呈する土坑である。長軸約1.4m、短軸約1.15m、深さは最大で約15cmを測る。内部は2段掘りになっており、1段目までの深さは約10cmである。この遺構からは弥生土器片が出土しているが、図示できるものはなかった。



第14図 1号石棺墓・1号祭祀土坑実測図 (1/30・1/20)



第15図 土坑実測図 (1/40)

2号土坑（第15図）

調査区東半東寄り、1号土坑の南で検出された平面不定形を呈する土坑である。長軸約2.4m、短軸は最大で約1.1m、深さは最大で約25cmを測る。この遺構からは弥生土器片が出土しているが、図示できるものはなかった。

31号土坑（第15図）

調査区西半ほど中央で検出された平面楕円形を呈する土坑である。1号方形周溝墓の周溝に中央を切られる。長軸約1.05m、短軸約0.7m、深さ約5cmを測る。この遺構からは石器が1点出土している。

39号土坑（第15図、図版4）

調査区西半の北端で検出された平面楕丸長方形を呈する土坑である。南端の一部を6号被棺墓に切られる。長軸約3.5m、短軸約1.6m、深さは最大で約40cmを測る。内部は2段掘りになっており、上段中央にて床面から若干浮いた状態で土器片が1点出土している。

40号土坑（第15図）

調査区東半の西寄りで検出された平面不定形を呈する土坑である。西側は1号近世溝に切られる。長軸約4.75m、短軸約1.6m、深さは最大で50cmを測る。この遺構からは弥生土器片が出土しているが、図示できるものはなかった。

出土遺物（第17図、図版5）

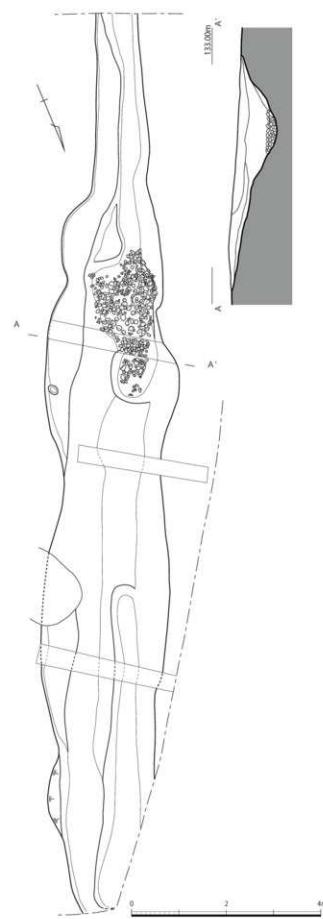
4は39号土坑から出土した弥生土器壺の底部である。口径は4.8cmを測り、やや上げ底味で厚い。外面にハケが残る。6は31号土坑から出土した二次加工剥片である。石材は黒曜石である。

9) 溝

調査区東半の西端で1条検出された。

1号溝（第16図、図版4）

調査区を南北に横切る溝で、当初は搅乱坑として扱っていたが、表土直下の一見地山とも思った赤土を取り除いた際に検出された。この赤土は現在の畑にする際に溝を埋め立てるものと思われる。表土直下両端とも調査区外へ延び、調査区内での検出規模は、長さ約19m、幅は最大で約2.8m、深さは最大で



第16図 1号溝実測図 (1/80)

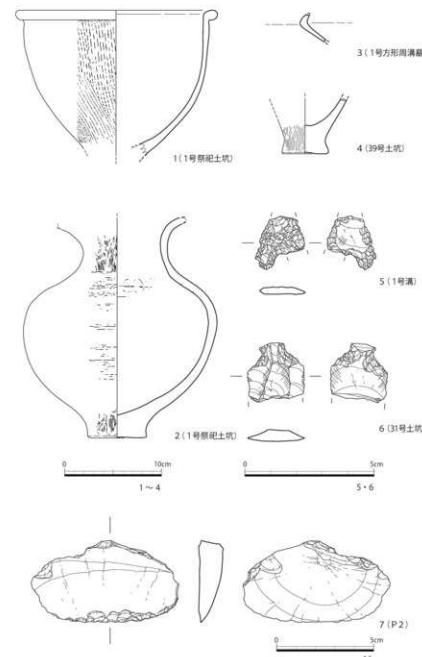
約80cmを測る。床面は北に向かって下がっている。南寄りの底部には小縫の集積が見られた。この遺構からは染付等の陶器器皿や土器片が出土しているが、図示できるものはなかった。ほかに石器が1点出土している。

出土遺物（第17図、図版5）

5は石鏃である。先端および一方の脚部を欠く。石材は黒曜石である

10) その他の遺物（第17図、図版5）

7は調査区東半中央北寄りで検出されたP2から出土した横長のスクレイバーである。石材はサヌカイトで、翼状剥片の縁辺部にわずかに剥離を施したのみである。



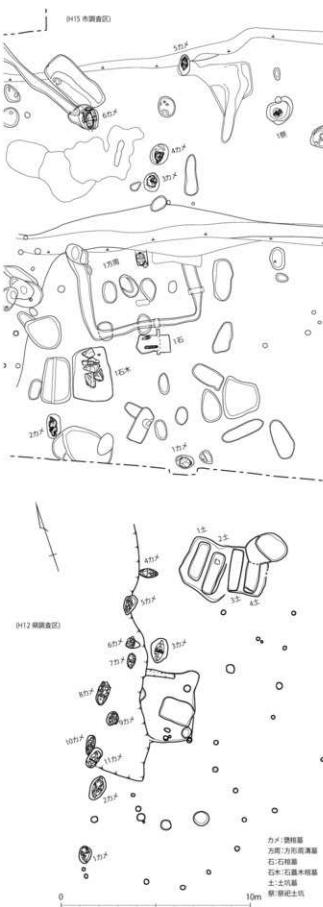
第17図 出土遺物実測図 (1/4・2/3・1/2)

IV まとめ

これまで説明した遺構・遺物について、時期や特徴を簡単にまとめる。

堅穴建物については、図示できる出土遺物はなかつたが、壁から張り出すタイプのカドマは日田地域では6世紀から出現する⁽¹³⁾こと、また同じ台地上にある上野第1遺跡⁽¹⁴⁾では奈良時代の堅穴建物群が確認されていることから、本遺跡の堅穴建物は古墳時代後期～奈良時代と捉えたい。掘立柱建物は隣接する県調査区でも奈良時代のものが確認されており、同様の時期と考えられる。

さて今回の調査のメインともいえる墳墓群についてみてみる。今回の調査では甕棺墓6基、方形周溝墓・石蓋木棺墓・石棺墓各1基が確認された。隣接する県調査区⁽¹⁵⁾では甕棺墓11基と土坑墓4基が検出されており、合せて甕棺墓17基、方形周溝墓・石蓋木棺墓・石棺墓各1基、土坑墓4基となる。今回確認された甕棺墓6基は単棺3基、合せ口3基で、3号甕棺墓以外は使用されている甕の特徴から、弥生時代中期初頭の城ノ越式に相当するものと思われる。単棺の3号については蓋の形を継承しており、他の甕棺墓よりも1段階古い「海式」の系統の特徴を示している。市内でこれまで調査された甕棺墓では最古級のものである。また2～5号甕棺墓は直線上に並んでおり、県調査分を合せると少なくとも約45mにわたり17基が1列または2列(市2～5号甕棺墓、市1～県1号甕棺墓)に並んでいることから、埋葬に対する強い規格性が看取される。甕棺墓以外の墓制も含めて墳墓同士の切り合いがほとんどないことから、埋葬後に目印となる施設の存在が想定され、今回の場合は後世の削平等により確認できなかったものの、埋葬時に生じると思われるわずかなマウンドのほか、今回の2～4号の甕棺墓内部に落ち込んでいる石材がその機能を果たした可能性が考えられる。また特筆すべき甕棺墓として、上棟を石材で囲った6号墓がある。石棺棺材併用墓は当市や隣接するうきは市・朝倉市でも散見され、「棺外施設を有する甕棺墓」として筑後川中流域の特徴と捉えられている⁽¹⁶⁾。甕棺文化圏の縁辺部にあたる日田の地域性が表れた埋葬方法の一例として注目される。石蓋



第18図 墳墓群部分拡大図 (1/200)

木棺墓は石材と木材を併用した墓坑の長辺が2mを超える大型の墓で、出土遺物がないため時期の比定は困難であるが、その規模や甕棺墓列中に他遺構と切り合わずに並ぶという立地から、甕棺墓と同時期のもので、県調査区の1～4号土坑墓とともにこの墓群の中心となる成人用の墓と考えられる。これまで日田盆地では資料が極めて少なくて不明であった弥生時代中期初頭の成人埋葬の良好な例といえる。そのほか、方形周溝墓については主体部から弥生土器が出土しているものの、出土状況から造墓時期を直接示すものとは考え難い。また石棺墓についても出土遺物がなく、時期は不明である。しかし両方とも前述の甕棺墓列に属する位置にあることから、同様の時期を想定しておきたい。なお祭祀土坑についてはその出土遺物が吹上遺跡9次調査38号貯蔵穴⁽¹⁷⁾の土器に類似しており、3号甕棺墓とは



第19図 H12調査区との合成図 (1/500)

ば同時期、板付 II C 式～城ノ越式（古）に含まれるものと考えられる。ほかにこの時期の遺構は今回の調査でも県調査区でも見つかっていないが、付近に存在する可能性を示唆している。

今回の調査区の北側は試掘トレンチの状況から水田・畠地開発の際に削平されている可能性が高いものの、南側の県調査区では本調査区と同様の弥生時代の墳墓群が確認されており、さらに南側にはなだらかに南に向かって高まる水田地帯が広がり、墓域が南に延びている可能性が高いと考えられる。住居よりも墳墓が多く見られることから、当時このあたりが墓域として強く認識されていた様子がうかがえ、数少ない成人棺を中心としながら小児棺で構成される列状埋葬群が、本遺跡の特徴といえる。

(注1) 滋賀県行『求来県の遺跡』町ノ堀跡第 8 区の調査』日田市埋蔵文化財調査報告書第 88 号 日田市教育委員会 2009

(注2) 田中裕介ほか『日田市高瀬跡群の調査 3 上野第 1 遺跡』一般国道 210 号日田バイパス建設に伴う発掘調査報告書Ⅲ 大分県教育委員会 2001

(注3) 高橋浩ほか『日田市高瀬跡群の調査 4 宮内遺跡・上野第 2 遺跡』一般国道 210 号日田バイパス建設に伴う発掘調査報告書Ⅳ 大分県教育委員会 2002

(注4) 流通銀行ほか『出土品 I～自然科學分析調査の記録・調査の結果』市内遺跡群発掘調査報告 13『日田市埋蔵文化財調査報告書第 112 号』日田市教育委員会 2014

(注5) 下村智吾ほか『吹矢 II ～ 9 ～ 11 次調査の記録』日田地区遺跡群発掘調査報告 4『日田市埋蔵文化財調査報告書第 52 号』日田市教育委員会 2004

第1表 出土器物観察表

件名 番号	遺傳名	種類	形	基		調 型		色 調	備 考	
				口付	脚部	底径	高さ	外面	内面	
9-1	1号墳棺蓋	生土上置	小底盤	96.1	(57.6)	12.6	60.2	浅黄色の潤 透石のリーフ オブス	ナゲー・深浮 き	良 淡黄褐色 淡黄褐色
9-2	2号墳棺蓋	生土上置	小底盤	43.8	(42.2)	-	(66.5)	透石の潤 透石のリーフ オブス	ナゲー・深浮 き	良 淡黄褐色 赤灰色
9-3	3号墳棺蓋	生土上置	小底盤	99.0	(40.0)	9.0	(7.5m) (29.6m) (29.6m)	透石の潤 透石のリーフ オブス	ナゲー・深浮 き	良 淡黄褐色 明黄褐色
9-4	4号墳棺蓋	生土上置	小底盤	17.0	(51.4)	12.1	55.5	ヨコナタハ ナタハナタ	ヨコナタハ ナタハナタ	良 に凸・溝褐色 に凸・溝褐色
9-5	5号墳棺蓋	生土上置	小底盤	12.0	(42.8)	10.0	(25.7m) (16.5m) (16.5m)	ヨコナタハ ナタハナタ	E-D ⁺ E-D ⁺ E-D ⁺	良 明黄褐色 明黄褐色 明黄褐色
9-6	6号墳棺蓋	生土上置	小底盤	39.0	-	(0.4)	(9.6m)	ヨコナタハ ナタハナタ	E-D ⁺ E-D ⁺ E-D ⁺	良 に凸・溝褐色 に凸・溝褐色 に凸・溝褐色
9-7	7号墳棺蓋	生土上置	小底盤	37.0	35.6	9.5	39.0	透石の潤 透石のリーフ オブス	ナゲー・深浮 き	良 に凸・溝褐色 に凸・溝褐色 に凸・溝褐色
9-8	8号墳棺蓋	生土上置	小底盤	45.1	-	11.9	49.6	ハケリ・横 たたみの潤 透石のリーフ オブス	E-D ⁺ E-D ⁺ E-D ⁺	良 に凸・溝褐色 に凸・溝褐色 に凸・溝褐色
9-9	9号墳棺蓋	生土上置	小底盤	39.9	39.2	8.6	46.5	ヨコナタハ ナタハナタ	E-D ⁺ E-D ⁺ E-D ⁺	良 に凸・溝褐色 に凸・溝褐色 に凸・溝褐色
9-10	10号墳棺蓋	生土上置	小底盤	28.9	-	-	(15.0)	ナゲー・ハクハ ナゲー・ハクハ	ナゲー ナゲー	良 明赤褐色 明赤褐色
10-1	祭祀土坑	生土上置	壺	20.9	-	-	(15.0)	ナゲー・ハクハ ナゲー・ハクハ	E-F ⁺	良 明赤褐色 明赤褐色
10-2	祭祀土坑	生土上置	壺	-	(20.1)	6.1	(22.7)	ナゲー・ハクハ ナゲー・ハクハ	E-F ⁺	良 に凸・赤褐色 に凸・赤褐色
10-3	祭祀土坑	生土上置	壺	-	-	-	(2.9)	ナゲー・ハクハ ナゲー・ハクハ	A-C	良 明赤褐色 明赤褐色
10-4	10号墳	生土上置	壺	-	-	4.8	(8.0)	ハケリ・ナゲ ナゲー・ナゲ	E-D ⁺ E-D ⁺	良 に凸・白褐色 に凸・白褐色

表中の単位はcm。○は現存または復原です。

附注:A角陶B 石窓 C 玻璃 D赤色和子 E 白色和子 F 褐色和子 G 黄色 H砂粒

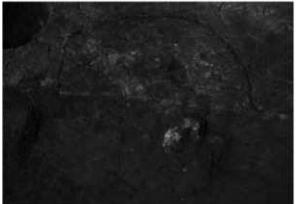
第2表 出土石器観察表

件名番号	遺傳名	種類	G材	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
17-6	1号甕	石窓	圓窓石	(2.05)	1.90	0.30	1.07	
17-7	3号甕	二次加工の片	圓窓石	(2.20)	2.20	0.45	2.19	
17-7	P2	スクリュー	ナスカイ	4.20	7.65	1.25	36.35	

*単位はcm
○は現存



1号竖穴建物 (東から)



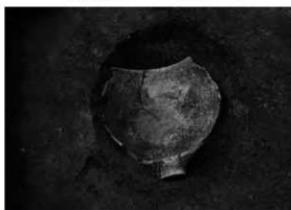
1号竖穴建物カマド (東から)



1号竖穴建物カマド土層 (東から)



1号竖穴建物 (西から)



1号甕 (東から)



2号甕 (東から)



3号甕 (東から)



3・4号甕 (西から)

図版 2



4号要棺墓（南西から）



5号要棺墓（北西から）



6号要棺墓（南東から）



6号要棺墓（北東から）



6号要棺墓 要棺除去後（南西から）



1号方形周溝墓 主体部検出状況（北から）



1号方形周溝墓 主体部完堀状況（北から）



1号方形周溝墓 全景（北から）

図版 3



1号方形周溝墓 全景（真上から）



1号石蓋木棺墓 検出状況（西から）



1号石蓋木棺墓 主体部掘り下げ状況（東から）



1号石蓋木棺墓 完堀状況（南から）



1号石蓋木棺墓 検出状況（南から）

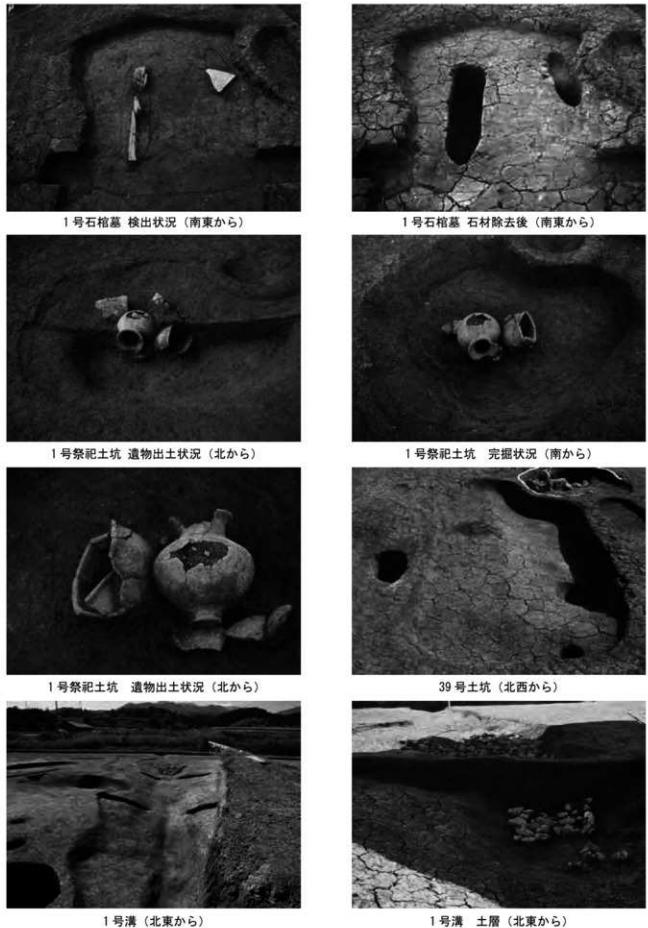


1号石蓋木棺墓 主体部掘り下げ状況（南から）



1号石蓋木棺墓 完堀状況（東から）

図版 4



図版 5



報告書抄録

ふりがな	うえのだいにいせき
書名	上野第2遺跡
副書名	—
巻次	—
シリーズ名	市内遺跡発掘調査報告／日田市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	15／第119集
編集者名	行枝桂子
編集機関	日田市教育文化庁保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2丁目6-1
発行年月日	2015年3月31日

収容遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえの だいにいせき 上野第2 遺跡	おおいたけん ひたし 大分県日田市 おおいたちの 大字上野	44204-6	204123 (上野遺 跡の一 部)	33° 18' 19"	130° 55' 12"	20030818 ~ 20031017	1,500m ²	記録保存 調査

収容遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野第2 遺跡	集落 墳墓	弥生 古墳～古代	甕棺墓6基 方形周溝墓1基 石蓋木棺墓1基 石棺墓1基 竪穴建物1軒 掘立柱建物1棟 土坑、ピット	甕棺 弥生土器 石器	弥生時代墳墓群の列埋葬

要約	調査では、弥生時代の墳墓群（甕棺墓6基、方形周溝墓1基、石蓋木棺墓1基、石棺墓1基）と、古墳時代後期～古代と思われる集落（竪穴建物1軒、掘立柱建物1棟）、その他土坑・ピットが確認された。特に弥生時代の墳墓群については、隣接地においても甕棺墓や土坑墓からなる墳墓群が確認されており、弥生時代にはこのあたりが墓域として意識されていたことがうかがわれる。ただし隣接地の調査では同じく弥生時代のものと思われる竪穴建物が墳墓群に近接して検出されているのに対し、今回の調査区では確認されていない。中でも注目される点としては、両調査区をとおして墳墓群が列状をなしていることが挙げられる。さらに今回調査の3号甕棺墓については、他の甕棺墓が弥生時代中期初頭の城ノ越式に分類されるタイプであるのに対し、それより1時期古い段階とされる金海式に分類される、壺から発展した形状を呈しており、市内でこれまでに確認されている甕棺墓の中では最古級のものと考えられる。
----	---

